

株式会社フジミインコーポレーテッド 株主通信

FUJIMI TODAY

2015.4.1～2015.9.30

vol.

41

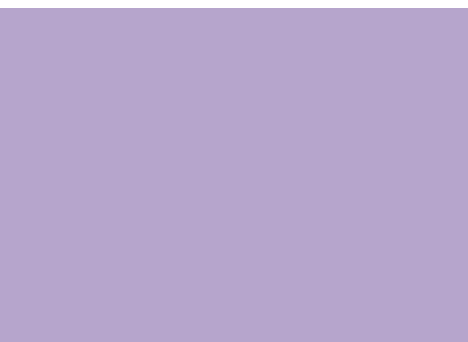
2015年12月発行

特集 「先端技術研究所」について

技術を磨き、心をつなぐ

証券コード 5384

FUJIMI



お客様目線の実践
革新への挑戦
新規事業・新規用途開拓の強化



技術を磨き、心をつなぐ

私たちの「磨く技術」は半導体をはじめとした
さまざまな産業で活かされています。
フジミはお客様にあらゆる製品を
磨いていただくことで、
人々が快適に暮らせる未来の創造に
貢献します。

代表取締役社長

関 敬史



株主の皆様へ

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

2016年3月期第2四半期連結累計期間の当社グループを取り巻く環境は、米国では景気回復基調が続きましたが、中国の経済成長の鈍化により、欧州、日本など先進国および新興国経済の先行きへの不透明感が強まる状況でありました。

また、世界半導体市場は、これまで成長を牽引してきた中国スマートフォン市場の減速が鮮明となり、第2四半期連結会計期間に入り需要の減退が見られました。

こうした状況下、当社グループでは一丸となって売上拡大とコスト削減に努めた結果、2016年3月期第2四半期連結累計期間の業績は、売上高16,753百万円(前年同期比2.4%増)、営業利益2,187百万円(前年同期比7.6%増)、経常利益2,441百万円(前年同期比9.2%増)、親会社株主に帰属する四半期純利益1,739百万円(前年同期比6.4%減)となりました。

本年4月に設置しました先端技術研究所において、CVC(コーポレート・ベンチャー・キャピタル)*ファンド設立に関する

フィジビリティスタディ(実行可能性調査)を行ってまいりました。その結果、11月にCVCファンドを設立いたしました。

その背景には、多様な技術が台頭し技術革新スピードが加速する中で、自社単独技術開発では限界があり、ベンチャー企業など外部との連携の必要性が増していることがあります。

中長期の時間軸で優れた製品や独自技術を有する有望ベンチャー企業に対し、ファンドを介して投資を行うことで幅広く新規事業創出の機会を探索いたします。そして、将来的には当社の企業ビジョンに掲げる「パウダー&サーフェイス分野」*で有望な技術シーズ、ビジネスアイデアを自社技術・事業として取り込むことで、事業のさらなる拡大に取り組んでまいります。また、ベンチャー企業に対する育成支援業務を通して、自社の組織活性化や人材育成にもつなげていきたいと考えております。

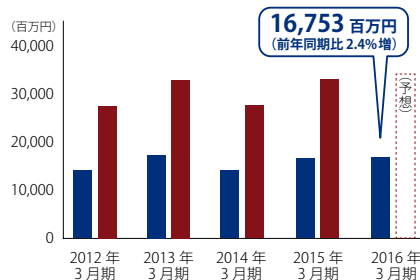
皆様のご厚情に感謝するとともに、これまでと変わらぬご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

連結決算ハイライト

■ 上期 ■ 通期 ● 通期

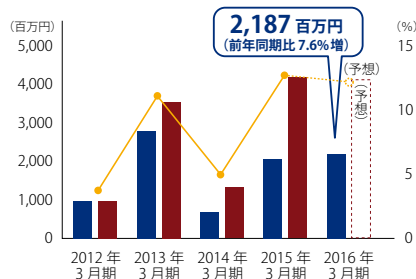
※2016年3月期通期は、2015年5月発表の予想値。

■ 売上高



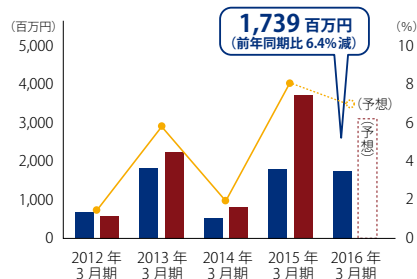
■ 営業利益・営業利益率

折れ線グラフ: 営業利益率(右軸)



■ 当期純利益・ROE

折れ線グラフ: ROE(右軸)



CVC

コーポレート・ベンチャー・キャピタルの略。自社の戦略目的のために、事業会社によるベンチャー企業への投資活動のこと。

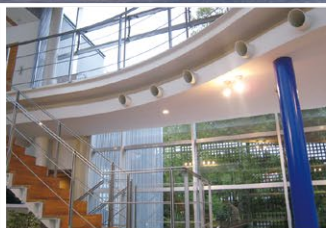
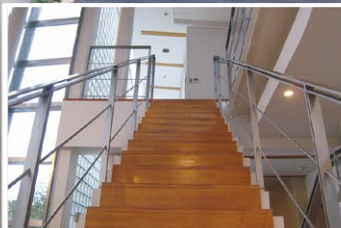
パウダー&サーフェイス分野

粉体・粒子(パウダー)と表面(サーフェイス)の分野を当社が係わるべき領域として企業ビジョンに掲げています。

特集

「先端技術研究所」について

5年先、10年先のフジミを育てる

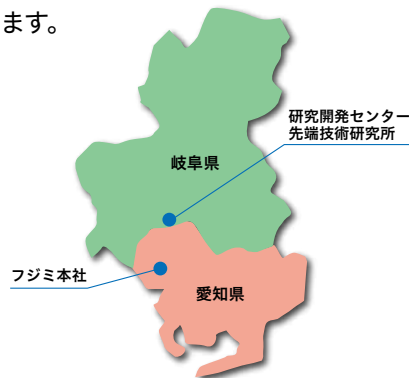


ある製品が市場に登場するには、まず市場でどのような製品が求められているのかの調査を行い、市場ニーズに合った製品を作り出すことが大切です。そして自社が持つ技術力や生産設備、人材、販売ルートなどを活用し、製品を開発し市場に販売します。

もちろん、投入される製品は「製品化できること」「市場に受け入れられること」「他社よりも優れた製品であること」などの要件を満たさなければなりません。

また、そうした要件を満たすためには、素材などの基本的な原理や性質を知る「基礎研究」、基礎研究で得られた知見を活用し、具体的な製品を作る「応用研究」、そして応用研究で生まれた技術を複数組み合わせる「開発研究」などの研究を行うことが重要になります。

今回の特集は、2015年4月に岐阜県各務原市テクノプラザ内に新設した「先端技術研究所」の設立目的や役割について、先端技術研究所長の扇谷聡へインタビューした内容を元に掲載いたします。



本社と研究開発センターおよび先端技術研究所の地理関係

2つの設立目的と3つの役割

先端技術研究所の設立目的は2つあります。

1つは既存事業のさらなる基盤強化のために、フジミが持つコア技術(「ろ過・分級・精製」「パウダー」「ケミカル」)を、先端技術研究所を通じて理解すること、そして事業本部間および機能本部間の連携を深め、さらに強いものとする。もう1つは、オープン・イノベーション*を強く意識した上で、中長期的視野での研究開発、新規事業機会の探索と創出を行うことです。

この2つの設立目的に沿い、先端技術研究所には3つの役割が求められています。

1つ目は、既存事業を支える基盤技術を深耕・強化しながら、次世代技術の探索と研究開発を進めること。

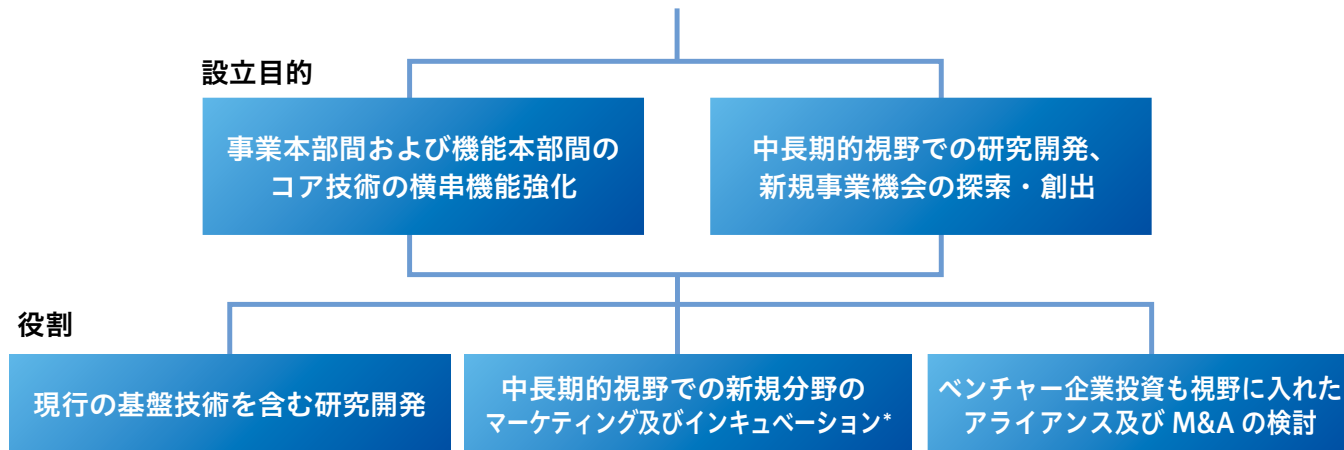
2つ目は、自社の既存技術と親和性があり、5年から10年先を見据えた将来技術を探索し、事業化させること。

3つ目は、5年、10年先の事業に必要な技術を持っているベンチャー企業やシナジー効果を見込める企業を自社外に見つけ、オープン・イノベーションを利用するとともにアライアンス*およびM&A*等の手法を用い、外部の技術を取り込むことです。



先端技術研究所長 扇谷聡

先端技術研究所設立目的と役割



 **オープン・イノベーション**
自社のみではなく、外部のアイデアや技術などを組み合わせることで、これまでにない革新的で新しい価値や成果を創り出すこと。

 **アライアンス**
互いのために相乗効果を期待し、複数の企業が対等な関係で協力しあうこと。

 **M&A**
Mergers(合併)とAcquisitions(買収)の略で、2つ以上の会社が1つになったり、ある会社がほかの会社を買収すること。

 **インキュベーション**
英語で“卵などがふ化する”という意味で、起業家の育成や新しいビジネスを支援すること。

役割1 既存事業のさらなる基盤強化

先端技術研究所の目指すべき役割の1つが、既存事業のさらなる基盤強化です。おのこの事業本部が、お客様と向き合う日常業務と将来の構想を描くことを同時に進行することは大変難しいと思います。

企業として継続的に将来にわたり社会へ貢献するためには、先を見据えた展開を構想することも必要になると考えています。

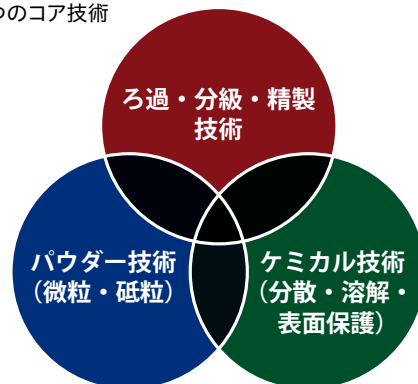
例えば、成長が見込める市場への参入、社会に貢献できそうな魅力ある技術についての将来への構想は、既存の技術を見つめ直すことから始まります。そうした技術探究や構想を先端技術研究所が担っていきます。

フジミには「ろ過・分級・精製」「パウダー」「ケミカル」という3つのコア技術があります。このコア技術を事業本部間と機能本部間の横串機能を強化させていくことが先端技術研究所の大切な仕事のひとつになります。

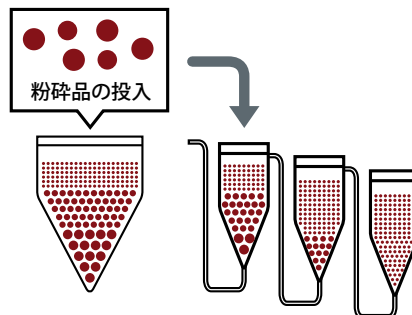
「ろ過・分級技術」は、粉体系・液体系の研磨材に共通する技術です。研磨材は1ミクロン(1000分の1ミリ)単位で細かく用途分けされており、粒子サイズが均一であることが求められます。1個でも大きな粒が混入すると、そこに圧力が集中して、母材(例えばシリコンウェハー)にキズを付けてしまう原因になりかねないからです。さらに精密で効率よくろ過・分級ができるようにしていきます。

「パウダー技術」ではお客様の用途に応じた一定の機能を持つ粒子の選定や評価を行う技術力があります。粒子が同じ大きさであってもさまざまな形や硬さのものがあり、それにより研磨効率は大きく異なります。先端技術研究所では、パウダー技術の質の向上も目指していきます。

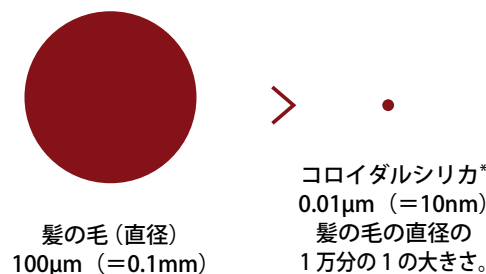
3つのコア技術



分級の様子



粒子サイズ

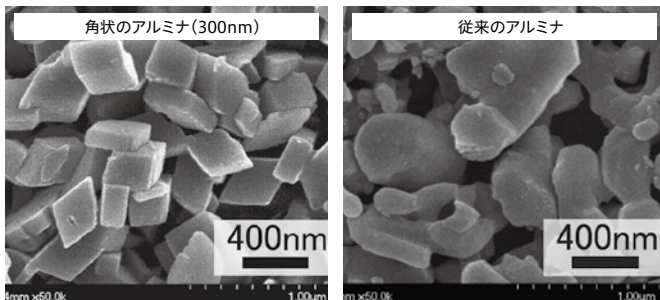


コロイダルシリカ

粒子径が10~300nmの微粒子状の二酸化けい素。



例えば研磨材の原材料のひとつであるアルミナ*は、原産地や製造法の違いなどにより多種多様なものが存在しています。それぞれの特性を分析しデータ化を行い、お客様の用途に応じた製品をタイムリーに供給できるようにすることも私たちの役割です。



粒子形状、粒子径の揃ったアルミナの粒子合成技術

「ケミカル技術」は、液体系の研磨材に利用される技術です。例えば、研磨した削りカスを分散し、溶かす液体の設計・選定を行います。ケミカル技術に関しては、現在各事業本部で対応していますが、今後は各事業本部からの要請により、サポートする体制の構築を予定しております。

 **アルミナ (酸化アルミニウム)**
 Al_2O_3 で表されるアルミニウムの両性酸化物。

役割2 新規事業の花を開かせること

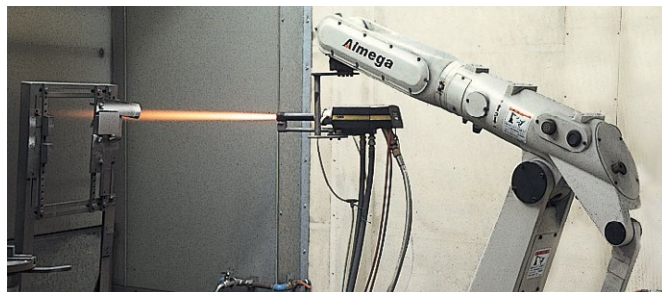
先端技術研究所が担う大きな役割の2つ目が、新規事業の探索と創出です。5年から10年先の事業となるようなビジネスの種を見つけ、その花を開かせていくためにどうすべきかを、具体的な施策として進めております。

現在は、新規事業の種を見つける段階です。そのためには、市場のニーズはもちろんフジミのシーズ*も重要であり、フジミのコア技術の延長線上にある市場を見つけ、つないでいくことがポイントになります。

フジミは「研磨材」の会社としてイメージされている方も多いと思いますが、現在「パウダー＆サーフェイス分野で世界最高の技術を提供する」を企業ビジョン(事業アイデンティティ)に掲げております。

パウダー＆サーフェイス分野とは、必ずしも「磨く」「削る」といった分野だけではなく、例えば「吹き付ける」「塗る」といった分野も含まれております。

一例をあげれば、フジミの溶射材製品は、当社が長年培ってきたろ過・分級技術、パウダー技術を用い、半導体製造装置や建設機械などの部材表面に耐熱・耐腐食・耐摩耗等を目的として溶射材を「吹き付ける」ことに応用した製品、ということになります。



溶射テストの様子

 **シーズ**
 企業が有する事業化、製品化の可能性のある技術やノウハウなどのこと。

また、近年はパウダー（粒子）サイズがナノレベル*で、吸着・吸水・吸湿などの機能的特徴を応用した各社の製品がさまざまな市場で展開されております。

先端技術研究所では、サーフェイス分野（「磨く」「削る」「吹き付ける」「塗る」などが行われる分野）やパウダー（粒子）が持つさまざまな機能的特徴を利用した分野と広く接触していくためのマーケティング活動に注力しております。

そのためにまず、フジミの技術の本質を見つめ直すことから始めております。具体的には、フジミの技術の本質を、科学の本質的な言葉に置き換えることです。例えば、『ナノレベルの研磨材』というよりも、具体的な数値やどのような科学原理でそれが得られているかを示した言葉を広く市場に紹介することで、当社がこれまで気づかなかった技術の可能性を、市場が気づかせてくれることも期待されます。

また、市場の可能性をさらに広げていくために、海外新規市場の開拓にも着手しております。米国では以前からスタートアップ*が盛んに行われ、その動きから新しい技術革新が起こり、新しい顧客ニーズの可能性が見えてきます。そして、このような流れの延長線上に、将来有望な市場になると考えられる動きが少しずつ見えてきます。こうした環境下でフジミが新しいネットワークを構築していくために、米国子会社であるフジミコーポレーションと連携し、積極的なマーケティング活動を展開しております。

こうしたマーケティング活動に携わるメンバーは、フジミの技術の本質を、科学の本質的な言葉に置き換えていく創造的作業が行えるよう、経営企画経験者や新規事業開発経験者、さまざまな研磨材開発、基盤技術開発、生産技術開発に携わってきたメンバーなど、幅広い分野の範囲をカバーできる専門性を有する人材で構成しております。

さらに、これまで当社は無機化学、機械工学専攻者を主に

採用してきましたが、当社の領域拡大を見据え最近では有機化学や高分子化学専攻者の採用も増やしております。



先端技術研究所では、特に力を入れて取り組んでいることがさらに2つあります。それは深い科学的な考察に基づいた研究開発手法と戦略的出願という特許戦略です。深い科学的な考察に基づいた研究開発手法では、トライ・アンド・エラー*になりがちな研究開発を、その都度しっかりと解釈を行うことでエラーの数を減らし、次世代・次々世代の開発を効率的に進めていきます。

また、特許を戦略的に出願することにより、競合他社に対する技術的優位性を保持し、後発参入を阻止してまいります。

ナノレベル

ナノは10億分の1メートルのこと。ナノレベルで、分子や原子レベルという意味になる。

スタートアップ

新しく設立された会社の中でも、特に新規事業領域を開拓する会社のこと。または、そのような会社を興すこと。

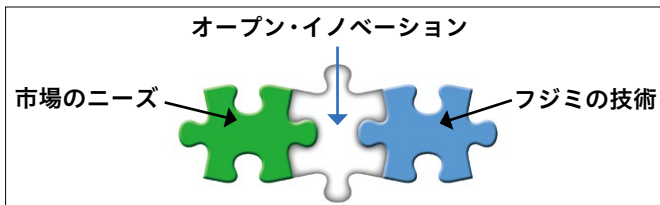
トライ・アンド・エラー

新しい物事を行う際に試みと失敗を繰り返しながら、その解決に向けて進んでいく行動のこと。

役割3 オープン・イノベーションの活用

先端技術研究所が担う大きな役割の3つ目がオープン・イノベーションへの取り組みです。

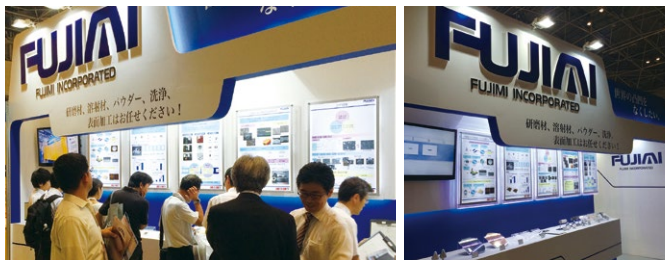
新規事業の花を開かせる上で、フジミの技術と市場のニーズがぴったりとはまるのが理想ですが、埋まりきらない溝に対する対応策として、オープン・イノベーションにも積極的に取り組んでいきたいと考えております。



オープン・イノベーションのイメージ

当社を取り巻く環境は、専門化、細分化、スピード化が進んでおります。そのすべてを自社でまかなうのではなく、外部との提携を視野に入れていくことが重要であると考えます。

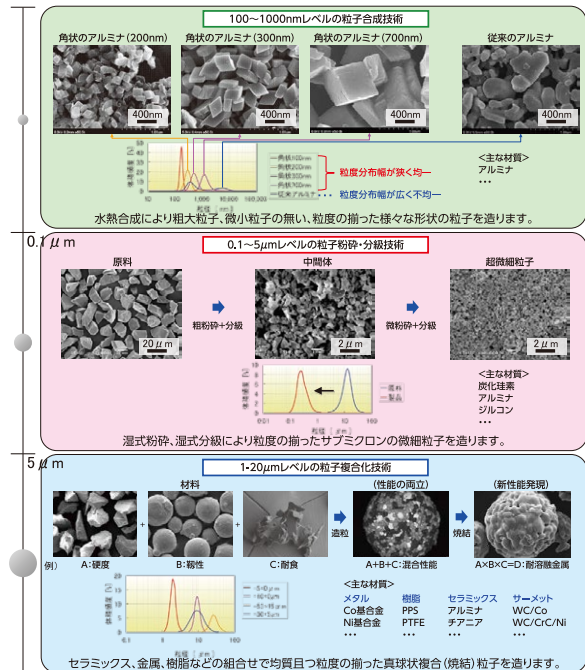
これまでの展示会の出展内容は「フジミ製品」の紹介が中心でしたが、外部との提携を模索する機会として、最近ではフジミが持っている「技術」の紹介に重きを置き、国内外で開催されるさまざまな技術展示会に出展しております。技術展示会は、さまざまなシーズを持った企業や当社の技術を必要としている企業と出会う場です。今年は、機械要素技術展や



技術展示会の様子

ナノ・サブミクロンの様々な粒子創れます

1950年の創業以来60余年培ってきたコア技術にさらに研鑽を加え、新たな用途に挑戦して参ります。



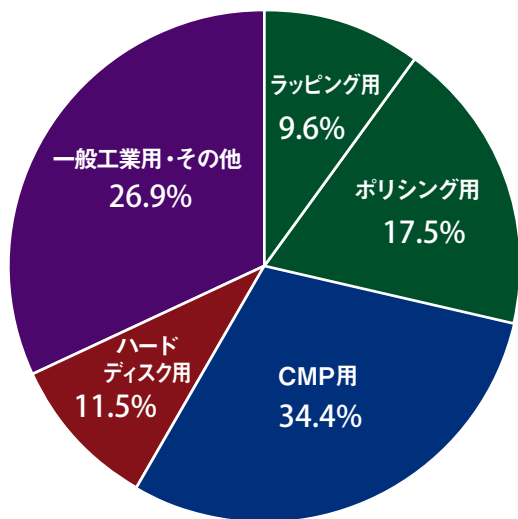
展示ポスター

その他の技術系展示会などへの出展を増やしています。また、大学や他の研究機関などとの産官学連携も積極的に進めています。

今後も外部との接触機会を増やし、その中からアライアンスやM&A、CVC等の手法を用い、新たな技術を取り込み、積極的にオープン・イノベーションを展開することで、中長期的な事業発展を目指してまいります。

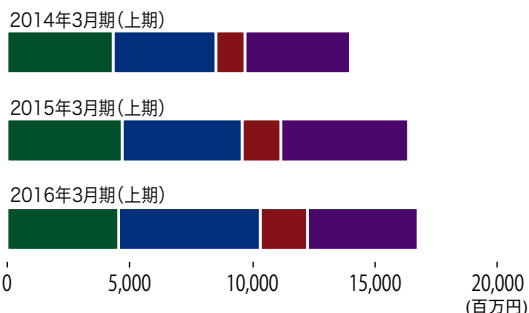
用途別の動き

2016年3月期(上期) 用途別売上高比率



■ シリコンウェハー用
■ CMP用
■ ハードディスク用
■ 一般工業用・その他

用途別製品 売上高推移



シリコンウェハー用

- 売上高：4,547百万円
- 前年同期比：3.1%減

シリコンウェハー向け製品につきましては、第2四半期連結会計期間に入り半導体需要に若干の減少が見られたことおよび前年同期が好調であったことから、ラッピング材の売上高は1,614百万円(前年同期比3.2%減)、ポリシング材の売上高は2,933百万円(前年同期比3.0%減)となりました。

CMP用

- 売上高：5,771百万円
- 前年同期比：18.1%増

CMP向け製品につきましては、アジア市場で最先端ロジックデバイス向け製品およびメモリデバイス向け製品の販売が好調であったことから、売上高は5,771百万円(前年同期比18.1%増)となりました。

ハードディスク用

- 売上高：1,924百万円
- 前年同期比：22.0%増

ハードディスク向け製品につきましては、ハードディスクドライブ市場は縮小傾向にあるものの、アルミディスク向け製品における当社シェア拡大により、売上高は1,924百万円(前年同期比22.0%増)となりました。

一般工業用・その他

- 売上高：4,509百万円
- 前年同期比：13.4%減

非半導体関連の一般工業用研磨材につきましては、第2四半期連結会計期間に入り当社製品の需要減退の動きが見られ、売上高は3,335百万円(前年同期比18.3%減)となりました。その他につきましては、売上高1,173百万円(前年同期比4.6%増)となりました。

パソコンを中心に、電子・IT関連機器の心臓部に使用されている半導体部品の土台がシリコンウェハー（半導体基板）です。このウェハーをいかに高精度に鏡面研磨できるかが、エレクトロニクス製品の性能を大きく左右します。当社グループの主力となるシリコンウェハー用製品では、お客様の期待に応える製品開発をタイムリーに行い、品質の高い新製品をいち早く市場に投入してまいります。



シリコンウェハーは、半導体部品の土台です。現在の主流は、直径が300mmで、表面を高精度に磨き上げるために超精密研磨材が使用されます。

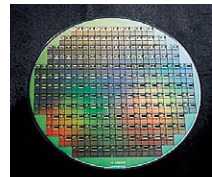


ラッピング材の主力製品
FO



ポリシング材の主力製品
GLANZOX

エレクトロニクス製品の小型化とともに高機能化・高性能化が急速に進み、半導体チップはますます高集積化・微細化が求められています。CMP（化学的機械的平坦化）用製品群は、長年にわたるシリコンウェハー用ファイナルポリシング材のノウハウを応用し開発され、多層配線技術に対応しています。お客様のロードマップにあった迅速な開発品の提供や技術サービスを核に、マーケットシェアの拡大を目指してまいります。



さまざまな情報通信機器やエレクトロニクス製品の技術進展が加速する中、半導体チップはますます小さく、その配線は細くなっています。肉眼では見えない細かな配線は12~14層にも積み上げられ、その製造過程において、CMP研磨は欠かすことができません。

CMP用の主力製品
PLANERLITE

ハードディスクは、パソコンの記憶装置、DVDレコーダー、カーナビなどにも搭載されており、最近ではクラウド向けの用途が拡大しています。デジタル家電の高機能化に伴い、プログラムやデータの高速読み出しが可能な小型・大容量のハードディスクの需要が高まり、シリコンウェハー同等の面精度が要求されています。各業界のニーズをいち早くキャッチし、開発期間の短縮化によりお客様の要求にあった新製品をタイムリーに提供してまいります。



写真や映像を手軽に加工したいという市場ニーズが高まり、技術革新が進んだことで、パソコン、デジタルカメラなどのデジタル家電は、より多くの情報が記憶できるようになりました。それに伴い、記憶装置であるハードディスクの研磨面にも今まで以上の高いレベルが求められています。

ハードディスク用の主力製品
DISKLITE

LED・ディスプレイ・パワーエレクトロニクス用部品の表面加工分野やパウダー技術を活かし、応用分野への研磨・研削材の開発にも積極的に取り組んでいます。最近では、新規用途の一般工業用研磨材にも注力しており、トータルソリューションの提供によりお客様の信頼を得ています。

溶射材は鉄鋼、航空機および半導体等さまざまな業界の溶射用途向けに、主にサーメット溶射材とセラミック溶射材を提供しています。



航空機、鉄鋼、発電、掘削、電子部品などさまざまな分野で利用される溶射材。



サファイヤ基板用の主力製品
COMPOL



溶射材の主力製品
SURPREX

連結財務諸表

連結損益計算書

	前第2四半期 連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)	当第2四半期 連結累計期間 (自平成27年4月1日 至平成27年9月30日)
売上高	16,363	16,753
売上原価	9,929	9,870
売上総利益	6,434	6,883
販売費及び一般管理費	4,400	4,695
営業利益	2,033	2,187
営業外収益		
受取利息	23	15
その他	195	247
営業外収益合計	219	262
営業外費用合計	17	9
経常利益	2,236	2,441
特別利益		
新株予約権戻入益	48	-
特別利益合計	48	-
税金等調整前四半期純利益	2,284	2,441
法人税、住民税及び事業税	741	419
法人税等調整額	△ 315	281
法人税等合計	426	701
親会社株主に帰属する四半期純利益	1,858	1,739

(単位：百万円)

売上高

世界半導体市場は、これまで成長を牽引してきた中国スマートフォン市場の減速が鮮明となり、第2四半期連結会計期間に入り需要の減退が見られましたが、CMP 向け製品およびハードディスク向け製品の販売が好調であったことから前年同期比2.4%増の16,753百万円となりました。

営業利益

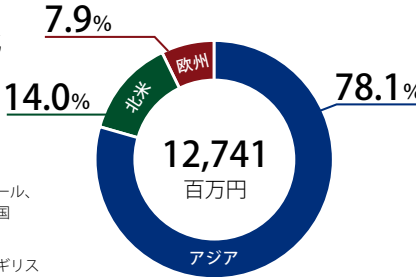
売上高の増加等により前年同期比 7.6%増の 2,187 百万円となりました。

親会社株主に帰属する四半期純利益

当期からフジミ台湾で法人税の支払いが始まったため、前年同期比 6.4%減の 1,739 百万円となりました。

海外売上高構成比
(第2四半期連結累計期間)

※各区分に属する地域の
主な内訳は次のとおりです。
■アジア：台湾、タイ、シンガポール、
マレーシア、韓国、中国
■北 米：米国、カナダ
■欧 州：ドイツ、イタリア、イギリス



海外売上高

	前第2四半期 連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)	当第2四半期 連結累計期間 (自平成27年4月1日 至平成27年9月30日)
海外売上高	12,523	12,741
連結売上高	16,363	16,753
連結売上高に占める割合	76.5%	76.1%

(単位：百万円)

連結貸借対照表

前第2四半期
連結会計期間
(平成26年9月30日)

当第2四半期
連結会計期間
(平成27年9月30日)

資産の部		
流動資産		
現金及び預金	15,689	17,750
受取手形及び売掛金	6,874	6,534
有価証券	5,105	6,704
たな卸資産	5,131	5,728
繰延税金資産	661	510
その他	209	238
貸倒引当金	△ 30	△10
流動資産合計	33,642	37,457
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物(純額)	7,794	7,608
その他(純額)	6,565	6,106
有形固定資産合計	14,359	13,714
無形固定資産		
529	677	
投資その他の資産		
投資有価証券	196	216
繰延税金資産	167	83
その他	1,523	502
貸倒引当金	△ 232	△124
投資その他の資産合計	1,655	678
固定資産合計	16,544	15,070
資産合計	50,187	52,528

(単位：百万円)

前第2四半期
連結会計期間
(平成26年9月30日)

当第2四半期
連結会計期間
(平成27年9月30日)

負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	3,241	2,990
未払法人税等	595	324
繰延税金負債	0	-
賞与引当金	922	861
役員賞与引当金	37	40
その他	1,480	2,749
流動負債合計	6,278	6,966
固定負債		
繰延税金負債	15	20
退職給付に係る負債	298	328
その他	21	20
固定負債合計	336	369
負債合計	6,615	7,336
純資産の部		
株主資本		
資本金	4,753	4,753
資本剰余金	5,069	5,038
利益剰余金	38,591	39,942
自己株式	△ 5,711	△ 5,379
株主資本合計	42,702	44,354
その他の包括利益累計額合計	869	836
純資産合計	43,571	45,191
負債純資産合計	50,187	52,528

(単位：百万円)

営業活動によるキャッシュ・フロー

営業活動の結果得られた資金は前年同期に比べて1,653百万円減少し、1,912百万円の収入となりました。これは、売上債権の増加額が減少したことによる資金の増加があったものの、法人税等の支払額が増加したこと、法人税等の還付額が減少したことおよび仕入債務が増加から減少に転じたことによる資金の減少があったこと等によるものであります。

投資活動によるキャッシュ・フロー

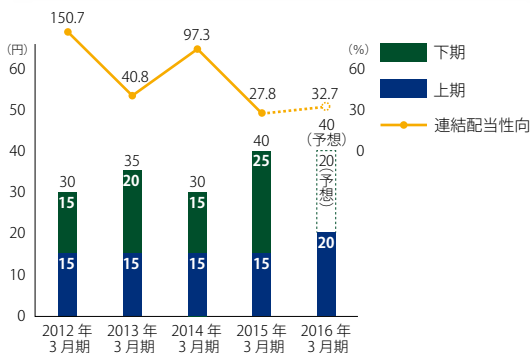
投資活動の結果得られた資金は、1,679百万円となり、前年同期と比べ2,810百万円の増加となりました。これは、定期預金の預入による支出が減少したことおよび定期預金の払戻による収入が増加したこと等によるものであります。

財務活動によるキャッシュ・フロー

財務活動の結果使用した資金は、前年同期に比べて242百万円増加し、635百万円となりました。これは、配当金の支払による支出が増加したこと等によるものであります。

配当金および連結配当性向の推移

当社は、株主に対する適正な利益還元を行うことを経営の重要課題と認識し、配当につきましては、30%以上の連結配当性向を目標として、業績に応じた積極的な株主還元に取り組んでまいりました。このような方針のもと、当期末配当金は、1株につき20円とし、年間配当金は、1株につき40円とする予定です。



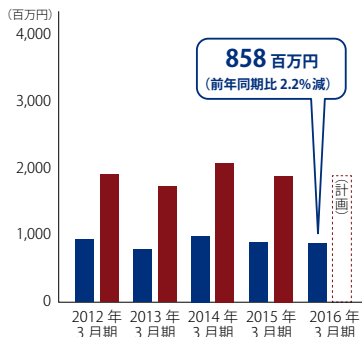
連結キャッシュ・フロー計算書

	前第2四半期 連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)	当第2四半期 連結累計期間 (自平成27年4月1日 至平成27年9月30日)
●営業活動によるキャッシュ・フロー	3,565	1,912
●投資活動によるキャッシュ・フロー	△1,130	1,679
●財務活動によるキャッシュ・フロー	△393	△635
現金及び現金同等物に係る換算差額	159	△356
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	2,201	2,599
現金及び現金同等物の期首残高	12,990	18,426
現金及び現金同等物の四半期末残高	15,191	21,025

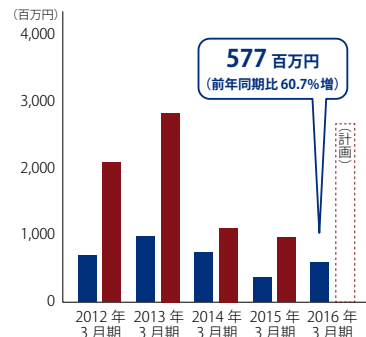
(単位：百万円)

■ 上期 ■ 通期 ● 通期

減価償却費

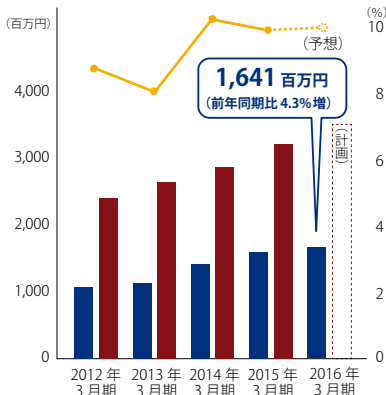


設備投資額



研究開発費・売上高比

折れ線グラフ：売上高比(右軸)



株式情報

2015 年 9 月 30 日現在

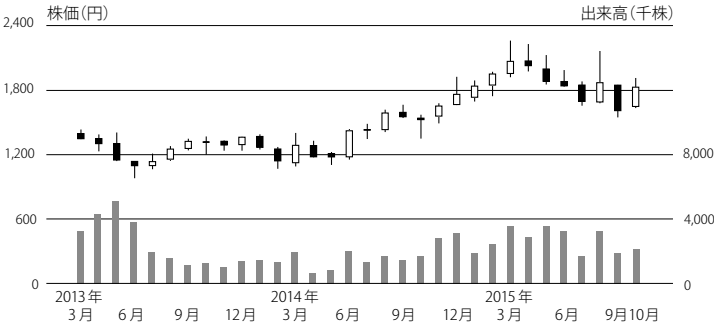
株式の状況

株式数	発行可能株式数	120,000 千株
	発行済株式総数	29,699 千株
	株主数	7,030 名

大株主 (株主名)	持株数 (千株)	持株比率 (%)
株式会社フジミインコーポレーテッド (自己株口)	4,360	14.6
越山 勇	2,902	9.7
有限会社コマ	1,638	5.5
日本マスタートラスト信託銀行株式会社 (信託口)	1,045	3.5
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 (信託口)	753	2.5
株式会社三菱東京 UFJ 銀行	728	2.4
株式会社りそな銀行	691	2.3
ステートストリートバンクアンドトラストカンパニー 505223	681	2.2
日本生命保険相互会社	639	2.1
フジミ取引先持株会	627	2.1

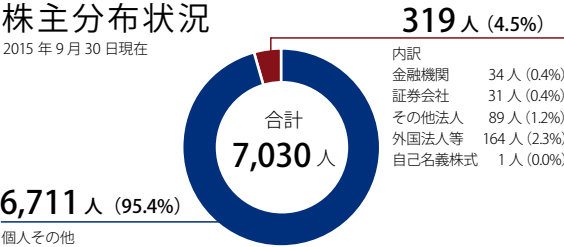
※持株数は千株未満を切り捨て、持株比率は小数点第 2 以下を切り捨てています。

株価および出来高の推移

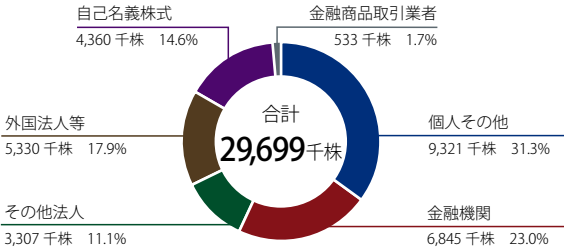


株主分布状況

2015 年 9 月 30 日現在



所有者別株主数



所有者別持株数

役員

2015 年
9 月 30 日現在

代表取締役社長	関 敬史
常 務 取 締 役	伊藤 広一
取 締 役	鈴木 彰
取 締 役	大脇 寿樹
取 締 役	鈴木 勝弘
取 締 役	川下 政美 *
常 勤 監 査 役	松島 伸男
常 勤 監 査 役	藤川 佳明
監 査 役	高橋 正彦 **
監 査 役	岡野 勝 **

(* 印は社外取締役) (** 印は社外監査役)

会社データ

2015 年 9 月 30 日現在

商 号	株式会社フジミインコーポレーテッド
証 券 コ ー ド	5384
本 社 所 在 地	愛知県清須市西枇杷島町地領 2-1-1 TEL. 052-503-8181 (代表)
設 立 年 月 日	1953 年 (昭和 28 年) 3 月 20 日
資 本 金	4,753 百万円
代 表 者	代表取締役社長 関 敬史
従 業 員	814 名 (個別 563 名)

株主メモ

2015 年 9 月 30 日現在

決 算 日	3 月 31 日
基 準 日	3 月 31 日
単 元 株 式 数	100 株
公 告 方 法	電子公告（ http://www.fujimiinc.co.jp ） ただし、事故その他やむを得ない事情によって 電子公告による公告をすることができない場合は、 日本経済新聞に掲載することといたします。
株主名簿管理人	〒100-8212 東京都千代田区丸の内一丁目 4 番 5 号 三菱 UFJ 信託銀行株式会社
同事務取扱場所	〒100-8212 東京都千代田区丸の内一丁目 4 番 5 号 三菱 UFJ 信託銀行株式会社 証券代行部
郵便物送付先 および照会先	〒137-8081 東京都江東区東砂七丁目 10 番 11 号 三菱 UFJ 信託銀行株式会社 証券代行部 電話 0120-232-711（通話無料）

各種手続のお申出先

- 支払期間経過後の配当金のお支払いについては、株主名簿管理人にお申出ください。
- 住所変更、単元未満株式の買取、配当金受取方法の指定等
証券会社をご利用の株主様は、お取引の証券会社へお申出ください。
証券会社をご利用でない株主様は、特別口座の口座管理機関である日本証券代行株式会社へお申出ください。

【ご注意】

特別口座に記録された株式に関する各種お手続きにつきましては、日本証券代行が口座管理機関となっておりますので、下記特別口座の口座管理人に、お問合わせください。

特別口座管理機関 連絡先	日本証券代行株式会社 〒168-8620 東京都杉並区和泉二丁目 8 番 4 号 日本証券代行株式会社 代理人部 電話 0120-707-843（通話無料）
-----------------	--

株式会社フジミインコーポレーテッド

お問い合わせ先：財務部経営企画課
TEL：052-503-8181（代表）
URL：<http://www.fujimiinc.co.jp>

Copyright (C) 2015 Fujimi Incorporated. All rights reserved.



この印刷物は、環境負荷低減のため古紙パルプを80%使用した環境対応紙と、植物油を使用し、VOCの排出を抑えた環境対応型リサイクルインキ「ベジタブルインキ」を使用しています。